

イルビリー著『悲嘆の除去』におけるスンナ派文献の戦略的引用
—— 超宗派的信仰として描かれる十二イマーム崇敬 ——

Strategical Quotation of Sunni Sources in the *Kashf al-Ghumma* by al-Irbili :
Describing Reverence for the Twelve Imams as Trans-sectarian Piety

水 上 遼

Ryo MIZUKAMI

Abstract ‘Alī b. ‘Īsā al-Irbilī (d. 1293 or 93/4), the famous Shi‘i scholar and secretary serving the governor of Iraq in the Ilkhanid period, compiled the *Kashf al-Ghumma*, a work of *faḍā’il* (virtues) on the Twelve Imams. Al-Irbilī employed a remarkable compilation strategy in the work to describe the reverence for the Imams as trans-sectarian piety. Al-Irbilī and other Iraqi Shi‘i *faḍā’il* authors shared this strategy and aimed to respond to the spread of reverence for the Imams among Sunnis.

As al-Irbilī declares in the introduction to the *Kashf al-Ghumma*, he quotes traditions related to the Imams from various Sunni sources and does not use many Shi‘i sources. He refrains from criticizing Sunnism or adopting the traditions which reproach the doctrines and beliefs of the opposite sect. Further, at the beginning of description of each Imam, he uses quotations from the *faḍā’il* works on the Imams by Sunnis, such as the *Maṭālib al-Su‘ul* by Ibn Ṭalḥa (d. 1254) and the *Ma‘ālim al-‘Itra* by al-Junābadhī (d. 1215). He usually closes the descriptions with quotations from a biographical dictionary by Sunni and anthologies highly regarded in the Sunni milieu. However, especially in the later part of the work, the regulation of the quotation unravels, and less Sunni sources are mentioned. This incompleteness reflects the fact that there were various opinions concerning the Imams even among the Imamophilic Sunnis; for example, al-Junābadhī dealt with only the eleven Imams in his work and did not mention the twelfth Imam. The *Kashf al-Ghumma*, which reflects the Imamophilia among Sunnis, was widely received directly or indirectly by Sunni *faḍā’il* authors and historians in Mecca, Iran, the Ottoman Empire and Mughal India.

Keywords al-Irbilī (イルビリー), 13th century Iraq (13世紀イラク), Sunni-Shi‘i relationship (スンナ派・シーア派関係), *faḍā’il* (美質の書), the Twelve Imams (十二イマーム)

は じ め に

12 世紀後半から 14 世紀前半のイラクにおいて、南部の都市ヒッラを中心に十二イマーム派シーア派（以下、断りのない限り「シーア派」とする）の教学が発展し、シーア派学者たちの学術活動が盛んになったことが知られる [Momen 1985 : 89, 94-96 ; Halm 2004 : 63-68]。アッバース朝最末期のカリフ・ムスタンスィル（位 1226-42）から庇護を受け、次いでイルハン朝初代君主フラグ（位 1258-65）に仕えたラディーユッディーン・アリー・イブン・ターウース・ヒッリー（Raḍī al-Dīn ‘Alī Ibn Ṭāwūs al-Hillī, 1266 年没）や、同王朝の君主オルジェイトゥ（位 1304-16）の宗教助言者となったアッラーマ・ヒッリー（al-‘Allāma al-Hillī, 1325 年没）に代表されるように、当時のヒッラのシーア派学者たちは、支配王朝と友好関係を築きながら、バグダードをはじめとするイラク地域やイラン高原の他のシーア派に社会的・学術的な影響を及ぼすようになっていた [Schmidtke 1991 : 23-32 ; Kohlberg 1992 : 5-9]。

ヒッラのシーア派学者たちやその弟子たちが繰り返し編纂した文献類型の一つに、初代イマームのアリーまたは十二イマーム全体に関する「美質の書」（faḍā’il/ manāqib/khaṣā’iṣ）がある。美質の書とは、特定の人物・モノの持つ種々の美質に関するクルアーンの章句やその解釈、ハディース・伝承を集めたものであり、イマームの美質の書はシーア派の間で主要な文献ジャンルの一つであった¹⁾。12 世紀後半からヒッラの学術環境で書かれた、あるいはその影響を強く受けて書かれた美質の書としては、イブン・ビトリーク・ヒッリー（Ibn al-Bitriq al-Hillī, 1204/5 年没）の『敬虔者たちのうちのイマームの美質に関する正しい伝承の精選のための支え al-‘Umda fī ‘Uyūn Ṣiḥāḥ al-Akḥbār fī Manāqib Imām al-Abrār』[UU] と『選ばれし者 [ムハンマド] の遺言執行者の美質に関する精選されし補遺 al-Mustadrak al-Mukhtār fī Manāqib Waṣīy al-Mukhtār』[MMM]、アスアド・ブン・イブラーヒーム・ヒッリー（13 世紀前半に活動）の『美質に関する四十ハディース集 al-Arba‘ūn Ḥadīthan fī al-Faḍā’il wa-l-Manāqib』[AH]、前述のラディーユッディーン・アリー・イブン・ターウースの『アリーの信徒たちの長たることへの適格性についての確信 al-Yaqīn bi-‘Ikhtisāṣ ‘Alī bi-Imrat al-Mu‘minīn』[YI]、彼の兄弟アフマド・イブン・ターウース（1274/5 年没）の『親ウスマーン論への反駁のための親ファーティマ裔論の構築 Binā’ al-Maqāla al-Fāṭimīya fī Naqḍ al-Risāla al-‘Uthmāniya』[BM]、アリー・ブン・イーサー・イルビリー（‘Alī b. ‘Īsā al-Irbīlī, 1293 または 94 年没。以下、「イルビリー」とする）の『イマームたちの知識に関する悲嘆の除去 Kashf al-Ghumma fī Ma‘rifat al-‘Imma』[KGh]、アッラーマ・ヒッリーの作品でイルハン朝のオルジェイトゥに献呈された『信徒たちの長の美質

1) イマームについての美質の書の他に、預言者ムハンマドや聖者、大学者などの人物や、クルアーンや都市などについての美質の書もある。用語を簡略化するため、以降では断りが無い限り美質の書と書く際にはイマームの美質の書を指すものとする。

についての確信の開示 *Kashf al-Yaqin fi Faḍā'il Amir al-Mu'minin*] [KY], ジャラルッディーン・アブドゥッラー・フサイニー (Jalāl al-Dīn 'Abd Allāh al-Husaynī, 15 世紀初頭没) がジャライル朝君主シャイフ・ウワイス (位 1356-74) に献呈した『シャリーア封印者の遺言執行人の美質についてシーアの行く道 *Manhaj al-Shi'a fi Faḍā'il Waṣī Khātām al-Shari'a*] [MSh] などがある。

イラクのシーア派学者たちによるこれらの美質の書の多くは、伝承の引用元としてスンナ派文献に大幅に依拠し、スンナ派教義自体に対する批判を抑制するという、共通した特徴を持つ²⁾。このことは、同時代にスンナ派の間でもシーア派が正統とみなすイマームたちへの崇敬が盛行していた、という点を反映していると考えられる³⁾。つまり、こうした美質の書からは、シーア派学者たちが他派であるスンナ派によるイマーム崇敬をどのように理解していたのかを垣間見ることができるのである。それゆえ、前述の美質の書の諸作品は当時のスンナ派・シーア派関係や宗派意識のあり方を検討するための重要史料になりうる。しかし、これらの美質の書に含まれる諸伝承は必ずしも歴史的事実を示すものではないため、今日まで編纂当時の社会の分析にはほとんど利用されてこなかった。この時代のシーア派が著した美質の書に焦点を当てたほぼ唯一の先行研究といえる、アフマド・イブン・ターウスの作品を扱う Afsaruddin [2002] も、作品や作者が当時の宗教的潮流から受けた影響については十分に関心を払っていない。また、シーア派十二イマーム伝を研究した Pierce [2016] は 12 世紀までの発展のみを扱っており、スンナ派の間での十二イマーム崇敬と強く関連して書かれた 12 世紀以降のシーア派の美質の書作品についてはほとんど論じていない⁴⁾。

そこで本研究では、一連のイラクのシーア派による美質の書作品の中でも最も大部なものであるイルビリーの『悲嘆の除去』に着目し、この作品が他宗派であるスンナ派の文献をいかに戦略的に引用しながらまとめられたのかを分析する。『悲嘆の除去』の重要性は、それ以前にイブン・ビトリークやラディーユッディーン・アリー・イブン・ターウスがアリーの美質をまとめる際に用いたスンナ派文献引用の方法を、十二イマーム全体の美質を論じるた

-
- 2) 前述のイラクのシーア派学者の美質の書作品のうち、アフマド・イブン・ターウスの『構築』については、スンナ派文献の多用という共通点はあるものの、著者が偽名を用い、スンナ派教義に対してもしばしば厳しい批判を記すなど、他の作品と性格が大きく異なっている。
 - 3) 十二イマーム崇敬をめぐるスンナ派・シーア派双方の主張の概要については水上 [2019] を参照のこと。従来シーア派的信仰の特徴とされたアリー裔崇敬やイマーム崇敬が 12-16 世紀ごろにスンナ派の間にも広がっていたことについては、これまで様々な研究がなされてきた。この問題の研究史については水上 [2020: 6-7] を参照のこと。
 - 4) Pierce は別の研究において 12 世紀に活動したシーア派学者イブン・シャフラーシューブ (Ibn Shahrāshūb, 1192 年没) の美質の書を扱い、イブン・ビトリークやラディーユッディーン・アリー・イブン・ターウス、アッラーマ・ヒッリーの美質の書はイブン・シャフラーシューブの影響を受けたものとしている [Pierce 2012: 451]。しかし、そうした影響関係の根拠について十分に提示していない。イブン・シャフラーシューブとヒッラの学者たちの美質の書の間にはスンナ派文献の多用などの共通点もあるが、引用方法や内容の展開、両者の置かれた社会的背景については相違点も少なくない。こうした問題については今後稿を改めて論じたい。

めに適用した点にある。本研究ではこの点に留意しながら、同時代のスンナ派学者の間でのイマーム崇敬の広がりをうけ、イルビリーが十二イマームへの崇敬を超宗派的なものとして位置づけようとしていたことを明らかにする。そして、『悲嘆の除去』の持つ特徴から、この作品がなぜ後代のスンナ派の作品に広く引用・利用されるようになったのかについても考察する。

同時に、前述のように『悲嘆の除去』は、ヒッラを中心とする12-15世紀イラクのシーア派学者たちの美質の書編纂活動の一部であった。イルビリーとヒッラの学者たちの子弟関係や、『悲嘆の除去』と他作品の影響関係を明らかにしつつ、彼らがどのような目的で繰り返し美質の書を編纂していたのかについても考察する。

I イルビリーと『嘆きの除去』

『嘆きの除去』の著者イルビリーは、イルビルの領主 (ḥakim) であったファフルッディーン・イーサー (Fakhr al-Dīn ʿĪsā b. ʿĪsā, 1266年没) の息子としてイルビルに生まれた。若き日のイルビリーは、故郷イルビルや同じく北イラクの都市であるモスルで活動していたと考えられる⁵⁾。当時のイルビルには、タージュッディーン・イブン・サラヤー (Tāj al-Dīn Ibn al-Salāyā, 1258年没) という、アッバース朝から派遣された代官 (nāʾib) がおり、領主と共に統治を行っていた [MA: vol. 3, 101-102]。イルビリーや代官イブン・サラヤーは人名録ではシーア派あるいはシーア派的傾向の持ち主であったと記されている [TI: vol. 52, 162-163; WW: vol. 5, 88, vol. 21, 251]。イルビリーは当初イルビルの文書局 (diwān al-inshāʾ) に出仕していたが、イブン・サラヤーがモスルの支配者バドルッディーン・ルウルウ (Badr al-Dīn Luʾluʾ, 1259年没) の謀略によってイルハン朝初代君主のフラグに殺害されると [TU: 112-113; Patton 1991: 62], 1258/9年または62年にイルハン朝の有力政治家アターマリク・ジュワイニー (ʿAlāʾ al-Dīn ʿAṭāʾ Malik al-Juwaynī, 1226-83) の治めるバグダードに赴き、同地の文書局書記となった⁶⁾。そして、ムスタンスィリーヤ学院で開催されていたマザーリム法廷に参加する有力者の一人になり、またモスクの管理を任されるなど、イルビリーはバグダードで有力な官僚、学者として活動した [KH: 321; DhTH: vol. 2, 314-315]。バグダード移住後、彼は『確信』の著者ラディーユッディーン・アリー・イブン・ターウスに学び [KGh: vol. 3, 321], 『確信の開示』の著者アッラーマ・ヒッリーに『悲嘆の除去』を教えるなど [TWSH: vol. 30, 184-185], ヒッラのシーア派学者たちと

5) モスルでの活動の例として、イルビリーは幼い頃に同地で *Tārīkh Irbil* の著者イブン・ムスタウフィー (al-Mubārak Ibn al-Mustawfī, 1239年没) に出会っている [TF: 70-71]。

6) イルビリーがバグダードにやって来た時期については史料間に相違があり、彼がアターマリクの側近に献呈した詩集作品である *al-Tadhkira al-Fakhriya* では1262年とされる一方、イブン・フワティー (Ibn al-Fuwaṭī, 1323年没) に帰されるヒジュラ7世紀イラクの年代記 *Kitāb al-Hawādith* などでは1258/9年である [TF: 29; KH: 371; TI: vol. 52, 162-163]。

交流を重ねた⁷⁾。

このようにバグダードで官僚・学者として活動したイルビリーの主著が十二イマームの美質をまとめた『悲嘆の除去』である⁸⁾。本書は2巻からなり、アリーの章までの第一巻(al-juz' al-awwal)が1279年に、それ以降の内容を含む第二巻は1288年に完成した[KGh: vol. 2, 136; vol. 4, 320]。本書の特徴は、イルビリー自身がその序文で明言しているように、作品中で言及される伝承の「大部分を多数派の人々(al-jumhūr)の[著した]諸々の書物から引用した」[KGh: vol. 1, 5]という点である。少し後の文章で「私は、多数派の人々が反論しないようなものについては、我々側の人々(aṣḥāb-nā)の諸書からも引用した」と書かれており、直接的に明言はしていないものの、「多数派の人々」がスンナ派を、「我々側の人々」がシーア派を示唆するものだということがわかる⁹⁾。つまり、イルビリーは本作品を編纂するにあたり、伝承の大部分をスンナ派の文献から引用したと主張しているのである。イルビリーはそうしたスンナ派の文献を用いた理由として、「反対者(khaṣm)の証言によって証明が成立することは、最も確かなことである」[KGh: vol. 1, 5]からとしている。「反対者」は明らかに先ほどの「多数派」、つまりスンナ派を指すと考えられる。スンナ派文献に依拠した美質の書、という点において、『悲嘆の除去』の性格はそれ以前にイラクのシーア派学者たちの作品である、イブン・ビトリークの『支え』やラディーユッディーン・アリー・イブン・ターウースの『確信』などと共通する¹⁰⁾。一方で、『支え』や『確信』が主にアリーの美質に焦点を当てたのに対し、『悲嘆の除去』は叙述の対象を全

- 7) この他に、イルビリーはヒッラの学者アブドゥルハミード・ブン・フィハール('Abd al-Ḥamid b. Fikhār, 1285/6年以降没)、ムフィードドッディーン・ムハンマド・ヒッリー(Mufīd al-Dīn Muḥammad al-Ḥillī, 1282年没)に学んでいる[KGh: vol. 1, 648; MA: vol. 5, 443-444]。イルビリーから学んだヒッラの学者としては、アフマド・ブン・マニーウ・ヒッリー(Aḥmad b. Manī' al-Ḥillī, 生没年不詳)や、アッラーマ・ヒッリーの兄弟アリー・ブン・ユースフ・ヒッリー('Alī b. Yūsuf al-Ḥillī, 14世紀前半没)、歴史家・系譜学者のイブン・ティクタカー(Ibn al-Ṭiqṭaqā, 14世紀前半没)がいる[KGh: vol. 1, (intro.) 33-42]。
- 8) 『悲嘆の除去』は十二イマームについての諸章の前に預言者ムハンマドについての章があり[KGh: vol. 1, 9-120]、またアリーの章の後にその妻でムハンマドの娘ファーティマや彼女の母ハディージャについてまとめた言及がある[vol. 2: 141-281]。しかし、後述する序文の内容から明らかのように、叙述の中心は十二イマームである。
- 9) もちろん、al-jumhūrの語がスンナ派に加えて十二イマーム派以外のシーア派諸派やハワーリジュ派などをも含む可能性を完全に否定することはできない。しかし、実際にそれらの少数諸派の文献は『悲嘆の除去』中で主要な情報源となっていない。また、作品中でこの語はシーア派に対置されるものとしてしばしば登場する[KGh: vol. 4: 202など]。このことをふまえると、al-jumhūrはスンナ派を指すものとみなして問題ないと考えられる。イブン・ビトリークの『補遺』や、ハナフィー派学者ザランディー(Jamāl al-Dīn al-Zarandī, 1346年頃没)の美質の書においても、スンナ派を意図する表現としてal-jumhūrが用いられている[MMM: 433; MW: 187]。
- 10) イブン・ビトリークは『支え』の序文で、シーア派文献を一切用いず、スンナ派の文献からの引用だけでアリーの美質をまとめている[UU: vol. 1, 61-66]。『確信』がスンナ派の情報源にもとづいて書かれていることについては、イルビリー自身が指摘している[KGh: vol. 1, 613]。実際に『支え』は引用のすべて、『確信』は引用の大部分がスンナ派文献から行われている。

十二イマームにまで拡大させており、その意味で新規性がある。

『悲嘆の除去』におけるスンナ派文献の引用について検討するうえで、イルビリーがスンナ派文献を用いたのはスンナ派全体を批判するためではなかったということに留意が必要である。彼は預言者ムハンマド、アリー、ハサンやフサインの美質についてはスンナ派・シーア派双方の学者たちが認めてきたとしながらも、「残りのイマームたちについては、彼ら（スンナ派）の有力者たちやウラマーのある集団（*jamā'a min a'yānihim wa-'ulamā'ihim*）は、その名前すらほとんど知らず、たとえ知っていたとしてもそれらを順番立って連なっているとはみなしておらず、それ以外については言わずもがなで [知らないの] ある」[KGh: vol. 1, 5-6] と批判し、次のような経験を記している。

私は近頃、彼ら（スンナ派）の裁判官たちや教授たちのうちで次のような者を見た。すなわち、ムーサー・ブン・ジャアファル（第7代イマームのカーズィム）[の廟]への参詣をよしとせず、我々がそこを参詣したときには、[一緒に参詣せずに] 壁のふちに座って我々を待っていて、[我々が参詣を終えた後に] 我々とともに戻るような者。彼らは清貧者やスーフィーの墓には参詣し、どんな言葉にも導かれることもできず、礼拝を行わず、不浄を遠ざけようともしない愚か者たちや頭の狂った者たちに対しては、彼らの教義が一致しているというだけで (*li-kawnihim 'alā 'aqa'idihim*) 愛着を示すというのに。[KGh: vol. 1, 6]

こうした記述からは、イルビリーはスンナ派を「反対者」と表現しつつも、実際に批判の対象としたのはスンナ派全体ではなく、スンナ派のうちで特に4代目以降のイマームの美質を認めようとしないう者に限られていることがうかがえる。事実、カーズィム廟はバグダードにおける主要な参詣地の一つであり¹¹⁾、13世紀前半には歴代アッバース朝カリフも同廟の修復や参詣を行っていた¹²⁾。おそらく、バグダードにいたイルビリーの周囲では、カーズィム廟参詣を行うスンナ派は珍しい存在ではなかったことだろう。なお、イルビリーは末期アッバース朝カリフについて、ムスタンスィルによるサーマッラーのイマーム廟参詣の様子を記すなど、比較的好意的に描いている [KGh: vol. 4, 271]。これは、イルハン朝下イラクでも

11) 例えば、14世紀前半にハムドゥッラー・ムスタウフィー (Ḥamd Allāh Mustawfī, 1344 頃没) によって書かれた *Nuzhat al-Qulūb* の地理書部分や、それぞれ12世紀後半と14世紀前半にバグダードを訪れたイブン・ジュバイル (1217年没) とイブン・バトゥータ (1368/9または77年没) の旅行記では、カーズィム廟はバグダードの代表的な参詣地とされている [NQ: vol. 2, 768, 774; メッカ巡礼記: vol. 2, 327; 大旅行記: vol. 3, 27]。

12) シーア派に好意的であったとされるアッバース朝カリフ・ナーズィル (位 1180-1225) はカーズィム廟や他のイマーム廟に対して修復事業などを行っていた [Hartmann 1975: 167]。次代カリフ・ザーヒル (位 1225-26) や最後のカリフであるムスタアズィム (位 1242-58) もまた、カーズィム廟を修復していた [アルファフリー: vol. 2, 269; KH: 288]。また、ムスタンスィルやムスタアズィムはカーズィム廟を訪れ、参詣や喜捨を行っていた [KH: 124, 213]。

アッバース朝カリフへの尊敬が失われていなかったことに配慮したものであろう¹³⁾。

さらに、イルビリーはバグダードに来る以前から、スンナ派の間のイマーム崇敬の高まりを認識していたと考えられる。イルビリーが最初に活動していた北イラクでは、前述のイブン・サラヤーの命令によって、シャーフィイー派学者ムハンマド・ブン・ユースフ・カンジー (Muḥammad b. Yūsuf al-Kanjī, 1260 年没) がアリーの美質の書である『アリー・ブン・アビー・ターリブの美質に関する求道者の充足 *Kifāyat al-Ṭālib fi Manāqib ‘Alī b. Abī Ṭālib*』や、マフディー (mahdī, 救世主) に関する伝承集『時代の主の伝承に関する説明 *al-Bayān fi Akhbār Ṣāhib al-Zamān*』を編纂し、前者において歴代の 12 人のイマームの美質にも言及していた¹⁴⁾。また、モスルのバドルッディーン・ルウルウのもとでは、ハンバル派学者アブドゥッラッザーク・ラスアニー (‘Abd al-Razzāq b. Rizq Allāh al-Ras‘anī, 1262 または 63 年没) がアリーの美質の書やフサインの殉教譚¹⁵⁾を執筆し、シャーフィイー派学者ウマル・ブン・シュジャーウッディーン・マウスィリー (‘Umar b. Shujā‘ al-Dīn al-Mawṣili, 13 世紀後半没) もまた十二イマームを含むアリー裔の美質の書『大いなる知らせである一族のための永続の恩寵 *al-Na‘im al-Muqīm li-‘Itrat al-Naba’ al-‘Azīm*』を著すなど、アリーとその子孫に関する美質の書がつくられていた¹⁶⁾。つまり、後に対立することになる北イラクの 2 人の有力者のもとでは、スンナ派学者たちによるアリー一族や十二イマームの美質の書の編纂活動が活発に行われていたのである。さらに、イルビリーは『悲嘆の除去』の中でカンジーの 2 つの作品を 1250 年にイルビルで著者自身から学び [KGh: vol. 1, 214, vol. 4, 200], モスルではラスアニーからも学んでいたと述べている [KGh: vol. 1, 166]。

-
- 13) イルハン朝のもとでイラクをまかされたアターマリクはアッバース朝カリフ一族との婚姻関係を築き、ジュワイニー家をアッバース家と結びつけることで統治を行っていた [Weissman 1990: 54, 58-59]。また、イルハン朝下イラクでは、イブン・サーイー (Ibn al-Sā‘ī, 1276 年没) が 1268 年 *Tārīkh al-Khulafā’ al-‘Abbāsīyīn* [TKhA] を編纂するなど、アッバース朝に関連する歴史書も編纂された。さらに、イブン・カーザルニー (Ibn al-Kāzarūnī, 1297 年没) はアッバース朝滅亡までの歴史書を著し、最後のカリフ殺害を悲劇として描いている [MT: 270-274]。
- 14) KGh: vol. 4, 200; KTM: 36-40。カンジーは序文において、1249 年にモスルの学者たちの間でアリー一族の美質をめぐる論争が起こったため、イブン・サラヤーがカンジーに『求道者の充足』編纂を命じた、としている。また、イルビリーはイブン・サラヤーからも伝承を学んでおり、親しい関係であったことがうかがえる [KGh: vol. 2, 174]。
- 15) ラスアニーの作品は現存せず、詳細は不明である。イルビリーは彼のアリーの美質の書から繰り返し引用するものの、そのタイトルは明らかにしていない。イルビリーによれば、このアリーの美質の書はモスルの支配者であったバドルッディーン・ルウルウのために書かれた [KGh: vol. 1, 147-148]。また、ラスアニーの同時代人であるイブン・シャッアール (Ibn al-Sha‘ār, 1256 年没) は、ラスアニーの著作としてフサイン殉教に関する *al-Mashra’ al-Ṣāfi min al-Mayn fi Maṣra’ al-Imām al-Shahīd Abī ‘Abd Allāh al-Ḥusayn* という作品を挙げている [QJ: vol. 4, 196]。この作品は、イブン・ラジャブ (Ibn Rajab, 1393 年没) が言及するところの、ラスアニーがバドルッディーン・ルウルウのために書いた *Maṣra’ al-Ḥusayn* という作品と同一もしくは関連するものと考えられる [DhTH: vol. 2, 275]。
- 16) 『永続の恩寵』の序文と末尾では、この作品がバドルッディーン・ルウルウのために書かれたことが記されている [NM: 30, 618]。

こうした動きと並行して、前述のようにバグダード周辺ではヒッラのシーア派学者たちを中心に、スンナ派文献に依拠した美質の書がつけられていた。また、同市周辺の一般住民の間ではイマームに関連した騒動が繰り返し発生していた。『悲嘆の除去』第一巻が完成する直前の1279年の初めには、バグダードで地面から光が発されて第2代イマーム・ハサンの子孫の墓が発見され、続いてイマームのうちの一の子孫の墓についての予知夢を語る者まで現れた。この事件では多くの住民がハサン裔の墓に参詣したり、予知夢にあったもう一つの墓を探そうとしたりしたため、アターマリクが事態の鎮静化に乗り出すまでに至った [KH: 441-442]。また、第二巻が書かれる前の1284年には、第12代イマームの尊称である「時代の主 (Sāhib al-Zamān)」の代理 (nā'ib) を称するアブー・サーリフやシャーミーといった人物がヒッラやワースイトなど南イラクで民衆の支持を集め、アブー・サーリフ支持者はバグダードから派遣された軍と衝突させしていた [KH: 475-476]。イルビリーがバグダードで活動していた時期に起こったこれらの出来事は、当時のイラクの民衆の間でのイマーム崇敬の高まりを反映していると言える¹⁷⁾。

これらのスンナ派・シーア派双方の美質の書編纂活動や民衆の動きを踏まえた上で、イルビリーは、イマームの美質を認めるスンナ派を読者として想定して本書を編纂したのだと考えられる。そして、イマーム崇敬の超宗派性を強調することで、周囲のスンナ派学者たちや有力者たちから支持を得ようとした。多くの人々が共有できるイマーム像を提示することで、イマーム廟を多く抱え、イマームやその子孫をめぐる混乱が生じていたイラク社会を安定させられるという考えを示そうとしたのであろう。

結果として、『悲嘆の除去』は同時代の一部のスンナ派学者に学ばれる作品となり、また、肯定的にせよ否定的にせよ、12-14世紀にイラクのシーア派によって書かれた美質の書のうちでその後のスンナ派学者たちに最も引用される作品となった。イルビリーの同時代人でありバグダードで活動していたハンバル派学者・歴史家のイブン・フワティーは、イルビリー自身から『悲嘆の除去』を学んでいた [MA: vol. 1, 511; TI: vol. 52, 163]。また、マリク派学者の Sharaf al-Dīn Aḥmad b. 'Uthmān al-Naṣībī (生没年不詳) という人物もイルビ

17) なお、イルビリーが『悲嘆の除去』第二巻を完成させた1288年という時期は、彼が仕え、イルハン朝下で栄えたジュワイニー家が迫害を受けて没落し、主要な政治家たちが次々と処刑された直後にあたる。アターマリクは1283年に没し、彼の後を継いだ甥のシャラフッディーン・ハールーンも1285年に殺害され、1290年までにジュワイニー家のほとんどが処刑された [Weissman 1990: 71-72]。『悲嘆の除去』第一巻がアターマリクの時代に書かれていたことから、イルビリーはジュワイニー家の庇護下で編纂時期の多くを過ごしたことは間違いない。しかし、現存するテキストにジュワイニー家に関する記述が一切見られないことは、こうした政治状況の変化によるものであろう。なお、シリアの歴史家ザハビー (Shams al-Dīn al-Dhahabī, 1348年没) は、イルビリーは「ユダヤ教徒の政権 (dawlat al-Yahūd)」が終わると身を引いて余生を過ごしたとしている [TI: vol. 52, 162]。この「ユダヤ教徒の政権」が、ジュワイニー家粛清の後に権力を握ったユダヤ系の政治家サアドッダウラの時代を指していることは明らかだろう。この記述が正しければ、イルビリーはサアドッダウラが殺害される1291年頃まで文書局にいたことになる。

リー自身から同書を学んでいたことが知られている [Ja'fariyān 1994/5: 52]。『悲嘆の除去』からの引用の例として、14世紀前半に活動したハナフィー派学者ザランディーは、自身の十二イマームの美質の書において『悲嘆の除去』から批判的に引用を行っている [MW: 200]。また、16世紀の歴史家・シャーフィイー派学者イブン・ルーズビハーン・フンジエ (Faḍl Allāh b. Rūzbihān Khunjī, 1521年没) は十二イマームの美質の書『しもべがあるじへと至る手段 *Waṣīlat al-Khādīm ilā al-Makhdūm*』において、『悲嘆の除去』を伝承の根拠として繰り返し引用している [WKh: 211, 216, 239, 258, 262, 289, 290, 293]。17世紀インドで活動した文人カシュフィー・ティルミズイー (Kashfī Tirmidhī, 1650年頃没) もまた、スンナ派としての立場でアリーとその一族についての美質の書『嘉されし者の美質 *Manāqib-i Murtaḍavi*』を著し、そこで『悲嘆の除去』を頻繁に引用している¹⁸⁾。

II 主に引用されるスンナ派・シーア派文献

『悲嘆の除去』序文にあるように、イルビリーは本文中で様々なスンナ派文献、あるいはスンナ派の間で知られている文献から引用を行っている。ここでそのすべてを挙げるのは冗長となるので、主要な引用元となっているもののみを示すこととする。5回以上引用される作品（一部人物）については、末尾の〔表1〕で引用箇所を宗派別にまとめた。

主要な引用文献としてはまずハディース集があり、特にムハンマドや初期のイマームたちの章では繰り返し引用される。その中心となるのは、スンナ派六書、そしてブハーリーとムスリムの両『真正集』に共通するハディースを集めたフマイディー (Muḥammad b. Futūḥ al-Ḥumaydī, 1095年没) の『両真正集に共通するもの *Jam' bayna al-Ṣaḥīḥayn*』、そしてイブン・ハンバル (Aḥmad Ibn Ḥanbal, 855年没) の『ムスナド *Musnad Ibn Ḥanbal*』である。ただし、『悲嘆の除去』中でのこれらのハディース集の引用は後述する他の文献からの孫引きであることもあり、イルビリー自身がどこまでこれらの作品を参照したかは不明である¹⁹⁾。これら以外に、ダイラミー (Shīrawayh b. Shahrādār, 1115年没) の『諸伝承の楽園 *Firdaws al-Akḥbār*』 [FA] や、イブン・ハムドゥーン (Abū al-Ma'ālī Muḥammad Ibn Ḥamdūn, 1166または67年没) のアダブ (教養) 書『ハムドゥーン選集 *al-Tadhkira al-Ḥamdūniya*』 [TH] 中のイマームの言葉についての伝承も頻繁に引用される²⁰⁾。

18) MM: 28, 48, 49, 56, 163, 194, 377, 386, 389, 395, 397, 400, 404, 407, 416, 418, 424, 429, 447, 458, 459, 481。ティルミズイーは本書の序文において、正統カリフに祈願文を記したり、アリー一族への尊敬がスンナ派と矛盾しないと述べたりと、自身のスンナ派の立場を強調している [MM: 4-5, 22-24]。

19) 例えば、スンナ派六書の一つであるイブン・マージャの *al-Sunan* は第12代イマームの章で幾度か言及があるが、すべてカンジーの作品からの孫引きである [KGh: vol. 4, 203, 204, 205, 208, 210, 211]。

20) ハディース・伝承集作品としては、この他にもバガウィー (Abū Muḥammad al-Ḥusayn)

ハディース・伝承集と同程度かそれ以上に引用されるのは、スンナ派の著した美質の書作品である。前述のとおり、美質の書とはハディースや伝承を集めた作品であるから、ハディース集と関連する分野とも言える。アリー個人やアリー一族を扱うものとしては、ドゥラービー (Abū Bishr Muḥammad al-Dūlābī, 923 年没) の『清らなる子孫 *al-Dhurriya al-Ṭāhira*』²¹⁾、イブン・マルダワイヒ (Ibn Mardawayh al-Iṣfahānī, 1020 年没) の『アリー・ブン・アビー・ターリブの美質 *Manāqib ‘Alī b. Abī Ṭālib*』²²⁾、イブン・マザーズイリー (Ibn al-Maghāzili, 1090 年没) の『信徒たちの長アリー・ブン・アビー・ターリブの美質 *Manāqib Amīr al-Mu‘minīn ‘Alī b. Abī Ṭālib*』 [MIM]、ナタンズイー (Muḥammad b. Aḥmad al-Naṭanzī, 1103 年没) の『アリーの美質 *al-Khaṣā‘iṣ al-‘Alawīya*』 [KhA]、アフタブ・ハーラズム (Akḥṭab Khwārazm, 1172 年没) の『信徒たちの長の美質 *Manāqib Amīr al-Mu‘minīn*』 [MAKh]、ラスアニーのアリーの美質の書などがある。

これらに加えて、『悲嘆の除去』では十二世紀以降にスンナ派の間で書かれた十二イマームまたは複数のイマームについての美質の書や関連する作品が多く引用される。まず、ムハンマドや各イマームの生没年をまとめた、ハンバル派学者イブン・ハッシャーブ (Ibn al-Khashshāb al-Baghdādī, 1172 年没) の『御家の人々の生没年 *Tārīkh al-Mawālīd wa-Wafayāt Ahl al-Bayt*』または『イマームたちの生年 *Mawālīd al-‘Imma*』が引用される。この2つの名称はおそらく同一の作品を指し、かつ写本が残る彼の『イマームたちの生没年 *Tārīkh al-‘Imma wa-Wafayātuhum*』 [TA] という短い論攷と同一のものであろう。同じくハンバル派に属したジュナーバズイー (‘Abd al-‘Azīz b. Maḥmūd al-Junābadhī, 1215 年没) の著した、現存しない作品『預言者の子孫の道標とファーティマ裔の御家の人々の知識 *Ma‘ālim al-‘Itra al-Nabawīya wa-Ma‘ārif Ahl al-Bayt al-Fāṭimīya*』もまた繰り返し引用される。ただし、この『預言者の子孫の道標』は第12代イマームを含めず、11人のイマームのみを扱う作品であったとされる [Dādāshnizhād 2010]。シャーフィイー派学者イブン・

↙ al-Baghawī, 1122 年没) の *Sharḥ al-Sunna* があり、これはバガウィーの代表作である *Maṣābiḥ al-Sunna* と同一のものと考えられる。ただし、バガウィーからの引用はアリーに関する章に集中している。ラフトウワーニー (Abū Bakr Muḥammad al-Laftuwānī, 1138/9 年没) の *Kitāb al-Arba‘in* もしばしば引用されるが、この作品は現存していない。この他に、まれに引用されるハディース集としては、マーリク派の名祖マーリク・ブン・アナス (795 年没) の *al-Muwatta‘* [KGh: vol. 1, 256]、アブダリー (Razīn b. Mu‘āwiya al-‘Abdarī, 1129 または 40 年没) によるスンナ派六書 (ただし、イブン・マージャの『スナン』の代わりに、マーリクの『ムワッター』が入る) の共通ハディースを集めた *al-Jam‘ bayna al-Ṣiḥāḥ al-Sitta* [vol. 1, 594, 605] などがある。

21) ドゥラービーはスンナ派学者の著した様々な人名録、歴史書の死亡記事でハディース伝承者とされる人物だが、その宗派・法学派については言及されないことが多い。15世紀のシャーフィイー派のハディース学者イブン・ハジャール・アスカラーニー (Ibn Ḥajar al-‘Asqalānī, 1449 年没) は、ドゥラービーがハナフィー派法学を学んでいたとしているが [LM: vol. 6, 506]、実際の宗派は不明である。

22) この作品は現存する *Manāqib ‘Alī b. Abī Ṭālib wa-mā nazala min al-Qur‘ān fī ‘Alī* [MNQ] と同一のものと考えられる。

タルハ (Muḥammad b. Ṭalḥa al-Naṣībī, 1254 年没) の十二イマームの美質の書『使徒一族の美質に関する願望の追求 *Maṭālib al-Su'ul fi Manāqib Āl al-Rasūl*』は、イルビリーが最も頻繁に引用するスンナ派文献の一つである。同じくシャーフィイー派学者カンジーの『求道者の充足』は、アリーについての美質の書だが、その中で十二イマームについても言及がある。

ハディース集、美質の書とともに頻繁に引用されるのが人名録である。そのうちでも、アブー・ヌアイム・イスファハーニー (Abū al-Nu'aym al-Iṣfahānī, 1038 年没) の『聖者たちの装飾 *Hilyat al-Awliyā'*』[HA] と、それを補完するために書かれたイブン・ジャウズイー (Ibn al-Jawzī, 1200 年没) の『精髓の性質 *Ṣifat al-Ṣafwa*』[SS] が多く引用される²³⁾。

スンナ派文献の多様さに比べると、イルビリーが用いるシーア派文献の種類は限られている。これらについても、5 回以上引用されるものは〔表 2〕で引用箇所をまとめた。引用の中心となるのは、『悲嘆の除去』と同じイマームについての美質の書である、シャイフ・ムフィード (al-Shaykh al-Mufid, 1022 年没) の『しもべたちに対する神のしるしの知識のための教導の書 *al-Irsād fi Ma'rifat Ḥujaj Allāh 'alā al-'Ibād*』[IM], ファドル・ブン・ハサン・タブリシー (al-Faḍl b. al-Ḥasan al-Ṭabrisī, 1153 年没) の『善導のしるしについての人類への知らせ *I'lām al-Warā bi-A'lām al-Hudā*』[IW], クトゥブッディーン・ラーワンディー (Quṭb al-Dīn al-Rāwandī, 1177/8 年没) の『奇跡の出現と支持者による論駁 *al-Kharā'ij wa-l-Jarā'ih*』[KhJ] の 3 作品である。その他、フマイリー ('Abd Allāh b. Ja'far al-Ḥumayri, 10 世紀前半没) の現存しない作品『神の使徒の導き *Dalā'il Rasūl Allāh*』や、タイトルへの言及はないが、シャイフ・サドゥーク (al-Shaykh al-Ṣadūq, 991 年没) からの伝承、アブー・サアド・アービー (Abū Sa'd al-Ābī, 1030 年没) の『真珠の散りばめ *Nathr al-Durr*』[ND] も用いられている。ただし、『真珠の散りばめ』はもともとアダブ書としてスンナ派の間でも知られた作品であった²⁴⁾。このように、『悲嘆の除去』ではスンナ派に関しては多様なものが繰り返し用いられているのに対し、シーア派文献の種類は限定的である。これはイルビリーが序文で述べた方針と一致していると言える。ただし、〔表 2〕で明らかのように、それぞれのシーア派文献からの引用箇所では刊本で数頁から時に数十頁

23) 『聖者たちの装飾』は、スーフィー系聖者とともに正統カリフや教友、一部のイマームを含む非スーフィー系の聖者たちをも集めた人名録であり [Tonaga 2004], その補遺である『精髓の性質』も同様の特徴を持つ。この他、歴史書ではタバリー (923 年没) やイブン・アスィール ('Alī Ibn al-Athīr, 1233 年没), クルアーン注釈書ではサアラビー (Abū Ishāq al-Tha'labī, 1035 年没) の作品などが 5 回以上引用される。

24) これらの他に、数回のみ引用されるだけであるが、シャイフ・トゥースイーの *al-Amālī* [KGh: vol. 2, 5, 12, 55], イブン・シャフラーシュューブの *Manāqib Āl Abī Ṭālib* [vol. 1, 483], イブン・ビトリーク・ヒッリーの『支え』[vol. 1, 590], ラディーユッディーン・アリー・イブン・ターウースの『確信』[vol. 1, 613] なども用いられている。

にわたりまとまった形で引用がなされることが多く、文章の量の点ではシーア派文献の比重が低いとは言えない。

次の節では、イルビリーがこれらをいかにして自らの主張に沿うように引用したか、彼の戦略的な引用について考察する。

Ⅲ スンナ派文献引用の選択性と規則性

イルビリーの文献引用には、可能な限り多くの文献を用いつつも、自らの主張に沿わない伝承を避けるという選択性と、各章の冒頭と末尾において特定の文献を順序立てて引用するという規則性の2つの特徴がある。

イルビリーの選択性について最もわかりやすくみられるのが、ガディール・フムム伝承に関する記述である。ガディール・フムム伝承とは、預言者ムハンマドが没する直前に信徒らに対して「私をマウラー (mawla) とする者にとって、アリーもまたマウラーである」と語った、というものである。マウラーは多義的な語であるが、シーア派の間ではシャイフ・ムフィールド以来、この語を「従うべき主 (al-sayyid al-muṭāʾi)」の意味であると解釈した [AM]。そして、この伝承こそが、ムハンマドがアブー・バクルでなくアリーを後継者に指名した最大の根拠であるとされてきた [Momen 1985: 15-16; Brown 2018: 151-152]。イルビリーもまた、ガディール・フムム伝承を述べた後で「(ムハンマドは) アリーに対し、彼の対面にある天幕に坐すよう命じ、信徒たちに対し、集団ごとに彼に会ってその場で彼を祝福し、彼が信徒たちの長の地位にあること (Imrat al-Mu'minin) を認めるよう命じた」 [KGh: vol. 1, 429] とし、この伝承をアリーのイマーム位指名の根拠と位置づけている。

しかし、この伝承について、スンナ派の間では異なる解釈も示されてきた。例えば、イブン・タルハの『願望の追求』では、マウラーの語の解釈は「従うべき主」ではなく「助け手 (al-nāṣir)」であるべきだとされ、イマーム位指名の根拠とはみなされない [MS: 80-81]。イルビリーはイブン・タルハから繰り返し引用を行っているにもかかわらず、シーア派にとって重要な主張と相反すると判断したためか、この伝承についてはイブン・タルハの解釈にはまったく触れていない。

その一方で、ガディール・フムム伝承を根拠としてアブー・バクル、ウマル、ウスマーンのカリフ位を不当とするシーア派の主張もまた、ここで触れられていないことには留意すべきであろう。この伝承の直後には、アリーのカリフ位時代の出来事としてラクダの戦いの記述が始まり、その間の3人のカリフの時代はまったく言及されず、3人の正統カリフの正統性を否定するシーア派の主張は黙殺されている。こうした3人の正統カリフの評価の回避は、スンナ派とシーア派はアリーのカリフ位について「後か先か (ta'khīr wa-taqdīm)」の問題はあるものの一致している [UU: vol. 1, 61-62]、としたイブン・ビトリークの叙述の影響もみられる。イルビリーもまた、スンナ派・シーア派双方にとって受け入れがたい主張は選

扱しないことにより、両派が共通してイマームを認め、崇敬してきたという印象のみを読者に残そうとしたのだと考えられる。このように、一方の宗派を強く否定するような伝承には言及しない、という姿勢は、『悲嘆の除去』全体に通底している²⁵⁾。

次に、引用の規則性について述べたい。冒頭での引用については、第2代から第11代イマームの章でイブン・タルハの『願望の追求』がまず引かれ、それにジュナーバズィーの『預言者の子孫の道標』からの引用が続く、という規則性がある。例えば、第6代イマームのジャアファル・サーディクの章では、最初にイブン・タルハからの長い引用が続き [KGh: vol. 3, 151-163]、直後にジュナーバズィーからの引用が始まる。次代のカーズィムの章でも、最初はイブン・タルハの引用で始まり、すぐにジュナーバズィーも同様の伝承を引いていることが述べられる [257-258]。同様の章の書き出しは、ハサン [vol. 2, 285-286]、第5代バーキル [vol. 4: 79-85]、第8代リダー [335-347]、第9代ジャワード [483-485]、第10代ハーディー [vol. 4: 5-7]、第11代アスカリー [55-56] の章で共通する。フサイン [vol. 2: 429-430]、第4代ザイヌルアービディーン [vol. 3: 5-36] の章ではイブン・タルハとジュナーバズィーからの引用 [vol. 3: 5, 23; 36] の間にシーア派のシャイフ・ムフィードからの引用 [23-25] が挟まるが、それらが章の序盤にまとめられていることは他の章と同じである。

ムハンマドと初代イマームのアリーの章は例外的に不規則で、ムハンマドの章ではまず初めにムハンマドの様々な尊称が列挙される中でジュナーバズィーの伝承が言及される [vol. 1, 28]。イブン・タルハからの引用の初出は遅く、章の終盤のムハンマドの御家の人々の美質に関する部分である [111]。一方、最長の章であるアリーの章ではイブン・マガーズィリー [124] やアフタブ・ハーラズム [133]、イブン・ハッシャーブ [133] などの引用から始まり、ジュナーバズィー [185] やイブン・タルハ [241] からの引用よりも前に多様な文献が言及されている。ムハンマドとアリーの章の構成が他のイマームたちの章と異なるのは、序文でイルビリーが語っているように、両者に関する美質の伝承はスンナ派側に数多存在するため、著名な文献を多数引用することの方が規則性よりも重視されたためであろう。その結果、イブン・タルハやジュナーバズィーの美質の書よりも、より広く知られた六書やイブン・ハンバルの『ムスナド』といったハディース集、アリーに関する美質の書などが先に引用されたのだと考えられる。

こうした章冒頭の引用は、各イマームの美質がスンナ派側の書物でも論じられてきたという印象を読者に与える効果を持っている。歴代イマームの美質の書という、イマーム崇敬の

25) 別の例としては、『聖者たち装飾』からの引用が挙げられる。『聖者たちの装飾』では、3人の正統カリフを非難するイラクの民に対してザイヌルアービディーンがその3人を擁護した、という伝承や、バーキルがアブー・バクルとウマルを否定する者たちを非難した、という伝承を記している [HA: vol. 3, 161, 216]。しかし、こうしたイマームがシーア派を非難しているかのような伝承は『悲嘆の除去』ではまったく触れられていない。

根幹ともいえる作品がスンナ派側でも書かれていた事実は、イルビリーにとって、各章の冒頭で示して最も強調したい点だったと考えられる。特にイブン・タルハからの引用は第12代イマームの章の冒頭でもなされており [vol. 4, 121-135]、ほぼすべての章の最初で言及されていることになる。このことは、『悲嘆の除去』においてイブン・タルハの『願望の追求』がスンナ派文献の中でも特別重要視されていたということを示している。

章の冒頭と並び、章の末尾においても、第4代から第8代イマームまでの章については引用の行い方にゆるやかな規則性がみられる。章の末尾では、多くの場合、イルビリー自身の総括と当該のイマームへの頌詩が記される。そして、その直前の部分ではイブン・ジャウズイーの『精髓の属性』と、アダブ書であるイブン・ハムドゥーンの『ハムドゥーン選集』とアービーの『真珠の散りばめ』が並べられる傾向がある。あるいは、これらの作品と著者の言葉・頌詩の間に付記的に別の文献が引用されることもある。第4代イマームのザイヌルアービディーンの章では、アービー [vol. 3, 61-66] とイブン・ハムドゥーン [66] からの引用の後、シーア派作品であるフマイリーの『神の使徒の導き』が手に入ったとして同作品からの付記的な引用 [66-73] が入り、章が終わる。第5代イマームのパーキルの章では、イブン・ジャウズイーの『精髓の属性』 [135-138]、アービー [138-142]、イブン・ハムドゥーン [142] が引用された後、イルビリー自身の言葉と頌詩 [143-147] で章が終わる。次代サーディクの章はイブン・ジャウズイー [233-235]、アービーの『真珠の散りばめ』 [235-249]、イブン・ハムドゥーン [247-250] と引用が行われ、最後に自身の言葉と頌詩 [250-253] で閉じられる。さらに次代カーズィムの章も同様にイブン・ジャウズイー [316]、アービー [316-319]、著者の注釈 [320-327]、イブン・ハムドゥーン [328-329]、著者の言葉と頌詩 [329-332] という流れになる。

続くリダーの章はやや特殊で、イブン・ジャウズイー [415-416]、アービー [416-418]、著者の言葉 [418-420]、再びアービー [420-423]、イブン・ハムドゥーン [423-424] と前章までと似たように引用が進むが、その後タブリスィーの『人類への知らせ』の6章 [425-466] と、リダーの墓所のあるマシュハドでイルビリーがみつけたというリダーとアッバース朝カリフ・マアムーンの間で交わされた手紙からの引用 [466-475] が長々と記され、著者の言葉と頌詩で閉じられる [475-480]。このリダーの章の末尾でのタブリスィーの写本の引用以降は、作品からの単純な引用という形式ではなく、イルビリー自身の体験・発見にもとづく付記であり、それを除けば前章までと類似した章末の構成になっていると言える。章冒頭と末尾での規則的引用については [図1] に図示した。

章冒頭で引用される文献とは異なり、章末ではアダブ書や人名録といったより広範なテーマを扱う作品から引用がなされている。これらの作品にも各イマームの記述があることを示すことにより、様々なジャンルの作品においてイマームが権威ある人物とされている、と読者に印象づけることができる。

章冒頭の構成がムハンマドとアリーの章で不規則だったように、章末の構成についても、

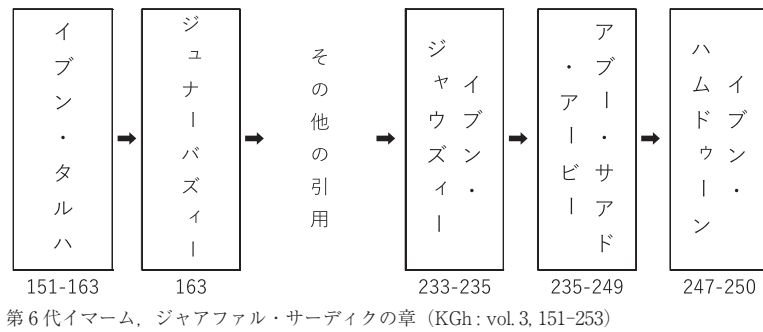


図1 規則的引用の例

ムハンマド, アリー, ハサン, フサインの4つの章では上述の5人のイマームの章と比べると不規則になっている。例えば, ムハンマドの章の後半は, ムハンマドの言葉による御家の人々の美質や, イマームの数が十二であることなどについての伝承が続き, その後の諸章で十二イマームを語る上での基礎的なハディースが列挙されている。フサインまでの3人のイマームについても, ハディース等で多くの文献が利用可能であったためか, 前述のような章末の規則性はあまり見られない。

他派の教義を否定するような伝承を除く選択性や, 多くのイマームの章でみられる引用の規則性には, イマームたちが超宗派的な信仰対象であることを際立たせる役割があると考えられる。選択的な引用により, イマームをめぐる宗派間の見解はほとんど一致しており, 相違点は最小限だったとすることができる。また, 冒頭と章末でスンナ派, あるいはスンナ派の間で知られていた作品からの引用を配置することにより, シア派文献からの比較的長い引用などはスンナ派文献からの引用に挟まれる形となる。そして, 章冒頭では美質の書が, 章末尾ではアダブ書や人名録が用いられることで, 多様なジャンルの作品でも繰り返しイマームへの言及があることが鮮やかに示されるのである。このような, 伝承の選択や配置によって著者の主張に沿ってイスラーム初期の人物を描く手法は, ドナーがイブン・アサーキル (1176年没) の『ダマスクス史』について考察した, 「選択の戦略」や「配置の戦略」と共通する [Donner 2001]。しかし, イルビリーの場合には, 特に後半のイマームたちの諸章で徐々に特に引用の規則性が保たれない, という別の特徴も見出さう。次の節では, この規則性が崩れについて考察したい。

IV 規則性の崩れとスンナ派によるイマーム崇敬の多様性

イルビリーが『悲嘆の除去』の執筆方法として宣言したスンナ派文献の多用や, 章の冒頭と末尾の引用にみられた規則性は, 終盤のイマームの章になるにつれて徐々に失われる。第9代イマームのジャワードの章では, イブン・タルハとジュナーバズイーからの引用が冒頭にあるものの, 末尾ではイブン・ジャウズイーへの言及がなくなり, 次代のアリー・ハー

ディーの章では末尾でイブン・ハムドゥーンの引用がなくなる。そして第12代イマームの章では、冒頭でイブン・タルハからの引用 [KGh : vol. 4, 121-126] がある以外は、それまで規則的に用いられてきた文献はほとんど引用されなくなる。規則性の崩れに伴い、イルビリーが章の中で引用するスンナ派の文献やスンナ派の間で知られている文献の種類も徐々に減少していく。〔表1〕で明らかなように、アリーやハサンの章では多くのスンナ派文献が繰り返し用いられていたのに対し、第12代イマームまで継続的に引用されるのはイブン・ハッシャーブとイブン・タルハの作品のみである。

章が進むにつれスンナ派文献の規則的な引用が崩れ、引用される文献の種類が減少していく背景には2つの要因が考えられる。一つ目は、アリーやその子孫の美質を記しつつも十二イマームという枠組みを受け入れてはいないスンナ派作品では、そもそも一部のイマームしか扱われない、という点である。人名録であるアブー・ヌアイムの『聖者たちの装飾』はアリー、ハサンと第4代から第6代イマームにあたる人物については独立した伝記があるが、それ以外のイマームについてはまったく語られないか、他の人物の伝記中で部分的に語られるのみである²⁶⁾。『聖者たちの装飾』を補完したイブン・ジャウズイーの『精髓の性質』では、さらに第7代イマームのカーズィムが独立した伝記で書かれている [SS : 363-364]。『ハムドゥーン選集』では、ムハンマドの子孫たちの言葉として、第8代イマームにあたるリダーと第9代にあたるジャワードの言葉が一つずつ引かれている [TH : vol. 1, 113]。十二イマームという枠組みを認めていないこれらの作品には、後半のイマームになるにつれて引用が難しくなる、という共通点がある。

もう一つの原因は、歴代イマームの美質を認めるスンナ派学者たちの間でも第12代イマームの評価では見解が分かれていた点である。イルビリーが第12代イマームの章まで一貫してその著作を引用し続けたイブン・ハッシャーブやイブン・タルハは、第12代イマームのムハンマド・イブン・ハサンの存在をみとめ、シーア派と同じく彼をマフディーと呼んでいる [TA : 253 ; MS : 311]。

一方、ジュナーバズイーの『預言者の子孫の道標』は第11代イマームまでのみを扱った美質の書であった。ジュナーバズイーが12代目を扱わなかった理由は、作品が残されていないため不明である。しかし、第11代イマームのアスカリーに息子がいて次代イマームとなったこと、さらにはその息子がマフディーとなったことを、ジュナーバズイーが認めていなかった可能性は高い。実際、十二イマームを扱う後代のスンナ派学者たちのなかには第12代イマームをマフディーとみなさない者もいた²⁷⁾。十二イマームを崇敬するスンナ派学者たちの間でも、マフディーについてシーア派と同様の見解をとるか否かで様々な立場があったのである。その結果、イルビリーは第12代イマームの章でスンナ派によるマフ

26) HA : vol. 1, 100-128, vol. 2, 43-48, vol. 3, 157-170, 211-224, 225-240.

27) 例えば14世紀のハナフィー派学者ザランディーは、第12代イマームはマフディーではないと強調している [MW : 183-189]。

ディーに関する様々な伝承を集めたが、ムハンマド・イブン・ハサンこそがマフディーであるという記述は専らイブン・ハッシャープとイブン・タルハの著作からの引用に頼ることとなった。その一方、マフディーに関する伝承集であるもの、マフディーが具体的に誰かということについて明言していないアブー・ヌアイム『マフディー伝承に関する40ハディース集 *al-Arba‘un fi Akhbār al-Mahdī*』やカンジーの『時代の主の伝承に関する説明』²⁸⁾ から大部分を引用することで、イブン・ハッシャープやイブン・タルハの主張をスンナ派文献で補強しようとしたのであった [KGh: vol. 4, 179-198, 200-230]。

主にスンナ派文献に依拠し、それらを規則的に配置して『悲嘆の除去』の編纂にあたったイルビリーであったが、十二イマームという枠組みを受け入れていない、または受け入れていてもシーア派と同様の立場を取らない文献が存在した結果、後半のイマームになるにつれてスンナ派文献の比重は下がり、引用の規則性は失われていった。この一見すると不完全に見える引用戦略は、『悲嘆の除去』編纂の際に何が優先されたかという点から理解できる。イルビリーにとって、イブン・ビトリークやラディーユッディーン・アリー・イブン・ターウースの方法論、すなわちスンナ派文献に依拠しつつスンナ派批判は避けるという編纂方法を、十二イマーム全体に適用させることこそが最も重要な点であった。そして次に、イブン・タルハの作品を軸に、十二イマームすべての章でスンナ派側の文献から引用を行った。しかし、すべてのイマームを扱う作品はイブン・タルハとイブン・ハッシャープのみであるため、それ以外の、一部のイマームにしか言及していないスンナ派文献も補足のために利用し、その中でも繰り返し言及できるジュナーバズィーやイブン・ジャウズィーなどの作品については、ジャンルごとに冒頭と末尾で規則的に引用したのである。このようにして、最終章までをスンナ派文献を引用しながらまとめきったことで、イルビリーが序文で述べた目的は達成されたのであった。

おわりに

若き日に北イラクにおいてスンナ派学者の間での十二イマーム崇敬の盛行に触れ、そしてバグダードではヒッラのシーア派学者のスンナ派文献に依拠したアリーの美質の書編纂活動に出会ったイルビリーは、『悲嘆の除去』を通じてヒッラの学者たちのスンナ派文献引用の方法を十二イマーム全体に拡大させようと試みた。その序文で述べられているように、ア

28) カンジーは『時代の主の伝承に関する説明』でマフディーが具体的に誰なのかということについて明言していないが、彼の『求道者の充足』の記述はそれを第12代イマームと同一視していることが確認できる。カンジーは第12代イマームを第11代イマームの息子とし、彼に「待望されし者 *al-Muntazar*」という尊称を用いている [KTM: 458]。そして、『求道者の充足』中にはこの「待望されし者」をマフディーの尊称としている箇所がある [KTM: 389]。このことから、カンジーがイブン・ハッシャープやイブン・タルハと同様に第12代イマームをマフディーとみなしていたことは明らかである。

リー、ハサン、フサインに関してはスンナ派側でも数多くの記述があり、彼らの美質についてスンナ派側の文献を収集することは比較的容易であった。『悲嘆の除去』編纂のためにイルビリーにとってより重要だったのは、特に第4代以降のイマームたちをいかにスンナ派文献にもとづき描くか、ということであった。

イルビリーはスンナ派文献でもイマームの権威が認められていることを効果的に示すために、各章の冒頭でスンナ派の著したイマームたちの美質の書を、末尾でスンナ派の間で知られた人名録やアダブ書を引用した。スンナ派側でのイマーム崇敬のあり方やイマームの位置づけは多様であったこともあり、この規則的配置は作品内で一貫したものにはならなかった。しかし、イルビリーにとって、第12代イマームまでを、第12代イマームこそがマフディーであるという点も含め、スンナ派文献とシーア派文献を並べて描き切る、ということこそが何より重要なことであった。『悲嘆の除去』がスンナ派のイマーム崇敬に関連する文献を、それまでスンナ派の間でもなされなかったほどに広範かつ効果的にまとめていたことは、この作品が12-14世紀イラクのシーア派学者による美質の書作品の中で、その後のスンナ派学者たちに最も参照された最大の要因と言える。

『悲嘆の除去』の後代のスンナ派作品への影響は、単に他の作品に直接引用されるというだけに留まらない。15世紀にヒジャーズ地方で活動したマーリク派学者イブン・サッバーク (Ali b. Muḥammad Ibn al-Ṣabbāgh, 1451年没) は、『悲嘆の除去』自体にはまったく言及しないものの、それとほとんど共通したスンナ派・シーア派文献を用いて十二イマームの美質の書『イマームたちの知識に関する要の諸章 *al-Fuṣūl al-Muḥimma fī Ma'rīfat al-A'imma*』を編纂した。この『要の諸章』では『悲嘆の除去』と共通するスンナ派・シーア派文献が引かれていること、『悲嘆の除去』中でのイルビリー自身の言葉が「私は言った」という部分が削られた形で『要の諸章』に引用されていることなどから、イブン・サッバークは『悲嘆の除去』に依拠しながらもそのことについての言及を避けていたことが明らかにされている [Dādāshnizhād 2016: vol. 1, 265-281]。『要の諸章』が広く読まれるようになった結果、後代のスンナ派学者は『悲嘆の除去』を直接、または『要の諸章』を介して参照することになった。16世紀に西アジアや中央アジアで活動した歴史家イブン・ルーズビハーン・フンジーは、自身の十二イマームの美質の書において『悲嘆の除去』と『要の諸章』の双方に言及している²⁹⁾。また、16世紀オスマン朝のスンナ派学者ムスタファー・ジェナービー (Muṣṭafā Cenābī, 16世紀末没) は自身の歴史書『ジェナービー史 *Cenābī Tārīhi*』の十二イマームの伝記部分において『要の諸章』を引用している。そこでは同時に、『悲嘆の

29) 引用回数では、『手段』において『悲嘆の除去』が計8回言及されているのに対し、『要の諸章』は1度のみであり、それも『悲嘆の除去』と同時に言及されている [WKh: 216]。一方、イブン・ルーズビハーンは別の作品 *Mihmān-nāma-yi Bukhārā* では『要の諸章』のみを引用している [MB: 343, 344]。また、彼の著作の中には『悲嘆の除去』の要約があったとされるが、現存しないため詳細は不明である [Khunji 1956/7: 183; Ja'fariyān 1994/5: 70]。

除去』でも繰り返し引用されたシャイフ・ムフィードの『教導の書』やタブリシーの『人類への知らせ』、イブン・タルハの『願望の追求』も利用されている [Erginbaş 2017: 632-633]。十二イマームの美質の書がスンナ派・シーア派双方で数多く編纂されてきたことをふまえれば、これらの引用文献の選択は『悲嘆の除去』から『要の諸章』を経て踏襲されたものと言えるだろう。スンナ派文献の効果的利用によって十二イマーム崇敬の超宗派性を主張する、というイルビリーの試みは、直接的または間接的に、その後の西アジア・中央アジア・インドで活動するスンナ派学者たちの作品にも影響を与えていた。

『悲嘆の除去』と似たような特徴を持つ美質の書を残した12世紀から15世紀までのイラクのシーア派学者たちは、シーア派の主張はスンナ派と矛盾しないと訴えつつ、十二イマームを崇敬する為政者や周囲のスンナ派学者からの支持を得ようとしていたのだと考えられる。この問題をより多角的に明らかにするために、今後は上記の時代のイラクのシーア派学者たちによる他の作品についても研究を進めていきたい。

参考文献

- AH : As'ad b. Ibrāhīm al-Ḥillī, *al-Arba'ūn Ḥadīthan fī al-Faḍā'il wa-l- Manāqib*, ed. Mushtāq Ṣāliḥ al-Muzaffar, Karbalā', 2013.
- AM : al-Shaykh al-Mufid, *Aqsām al-Mawlā fī al-Lisān*, ed. al-Shaykh Mahdī Najaf, [Qom], 1992/3.
- BM : Aḥmad Ibn Ṭawūs al-Ḥillī, *Binā' al-Maqāla al-Fāṭimiya fī Naqd al-Risāla al-'Uthmāniya*, ed. al-Sayyid 'Alī al-'Adnānī al-Ghurifī, Qom, 1990.
- DhTH : Ibn Rajab, *Kitāb al-Dhayl 'alā Ṭabaqāt al-Ḥanābilah*, ed. Muḥammad Ḥamid al-Fiḳī, 2 vols, Cairo, 1952/3.
- FA : Shirawayh b. Shahradār al-Daylamī, *Kitāb Firdaws al-Akhār bi-Ma'thūr al-Khiṭāb al-Mukharraj 'alā Kitāb al-Shihāb*, ed. Fawwāz Aḥmad Zumirli and Muḥammad al-Mu'tasim Billāh al-Baghdādī, 5 vols, Beirut, 1987.
- HA : Abū Nu'aym al-Iṣfahānī, *Ḥilyat al-Awliyā' wa-Ṭabaqāt al-Asfiyā'*, ed. Muṣṭafā 'Abd al-Qādir 'Aṭā, 12 vols, Beirut, 1997.
- IM : al-Shaykh al-Mufid, *al-Irshād fī Ma'rifat Ḥujaj Allāh 'alā 'Ibād*, ed. Mu'assasat Āl al-Bayt li-Iḥyā' al-Turāth, 2 vols, Beirut, 1995.
- IW : al-Faḍl b. al-Ḥasan al-Ṭabrisī, *I'lām al-Warā bi-A'lām al-Hudā*, ed. Mu'assasat Āl al-Bayt li-Iḥyā' al-Turāth, 2 vols, Qom, 1996.
- KGh : 'Alī b. 'Īsā al-Irbilī, *Kashf al-Ghumma fī Ma'rifat al-'Imma*, ed. 'Alī Āl Kawthar, 4 vols, Qom, 2012.
- KH : Ibn al-Fuwaṭī (attri.), *Kitāb al-Ḥawādith*. ed. Bashshār 'Awwād Ma'rūf and 'Imād 'Abd al-Salām Ra'ūf, Beirut, 1997.
- KhA : Muḥammad b. Aḥmad al-Naṭanzī, *al-Khaṣā'ish al-'Alawīya 'alā Sā'ir al-Bariya*. ed. 'Alī Āl Kawthar, Qom, 2011/2.

- KhJ : Quṭb al-Dīn al-Rāwandī, *al-Kharā'ij wa-l-Jarā'ih*, ed. Mu'assasat al-Imām al-Mahdī, 3 vols, Qom, 1989.
- KT : Ibn al-Athīr, *al-Kāmil fī al-Tārikh*, 13 vols, Beirut, 1965-1966 (reprint of *Ibn-el-Athiri Chronicon quod perfectissimum inscribitur*, ed. Carolus Johannes Tornberg, Leiden, 1851-71).
- KTM : Muḥammad b. Yūsuf al-Kanjī, *Kifāyat al-Ṭālib fī Manāqib 'Alī b. Abī Ṭālib*, ed. Muḥammad Ḥādī al-Aminī, Tehran, 1983/4.
- KY : al-'Allāma al-Hillī, *Kashf al-Yaqīn fī Faḍā'il Amīr al-Mu'minin*, ed. 'Alī Āl Kawthar, Qom, 1992/3.
- LM : Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Lisān al-Mizān*, ed. 'Abd al-Fattāḥ Abū Ghadda, 10 vols, Beirut, 2002.
- MA : Ibn al-Fuwaṭī, *Majma' al-Ādāb fī Mu'jam al-Alqāb*, ed. Muḥammad al-Kāzīm, 6 vols, Tehran, 1995/6.
- MAKh : Akḥṭab Khwārazm, *al-Manāqib*, ed. Mālik al-Maḥmūdī, 2nd edition, Qom, 1993.
- MB : Faḍl Allāh b. Rūzbihān Khunji, *Mihmān-nāma-yi Bukhārā*, ed. Manūchīr Sutūde, Tehran, 1976.
- MIH : Aḥmad Ibn Ḥanbal, *Musnad al-Imām Aḥmad b. Ḥanbal*, ed. Muḥammad 'Abd al-Qādir 'Aṭā, 12 vols, Beirut, 2008.
- MIM : Ibn al-Maghāzili al-Wāsiṭi, *Manāqib Amīr al-Mu'minin 'Alī b. Abī Ṭālib*, ed. Turki b. 'Abd Allāh al-Wādī'i, Ṣan'a', 2003.
- MMM : Ibn al-Biṭriq al-Hillī, *al-Mustadrak al-Mukhtār fī Manāqib Waṣī al-Mukhtār*, ed. Sa'īd 'Irfāniyān, Qom, 2015.
- MM : Kashfī Tirmidhī, *Manāqib-i Murtaḍavī*, ed. Kūrush Mansūri, Tehran, 2001/2.
- MNQ : Ibn Mardawayh al-Iṣfahānī, *Manāqib 'Alī b. Abī Ṭālib wa-mā Nazala min al-Qur'ān fī 'Alī*, ed. 'Abd al-Razzāq Muḥammad Ḥusayn Ḥirz al-Dīn, Qom, 2003/4.
- MS : Kamāl al-Dīn Ibn Ṭalḥa, *Maṭālib al-Su'ul fī Manāqib Āl al-Rasūl*, ed. al-Sayyid 'Abd al-'Aziz al-Ṭabātabā'i, Beirut, 1998/9.
- MSh : Jalāl al-Dīn 'Abd Allāh b. Sharafshāh al-Ḥusaynī, *Manhaj al-Shi'a fī al-Faḍā'il Waṣiy Khātām al-Shari'a*, ed. al-Sayyid Hāshim al-Milānī, [Iran], 1999/2000.
- MT : Ibn al-Kāzarūnī, *Mukhtaṣar al-Tārikh min Awwal al-Zamān ilā Muntahā Dawlat al-Banī al-'Abbās*, ed. Muṣṭafā Jawwād, Baghdad, 1970.
- MW : Jamāl al-Dīn al-Zarandī, *Ma'ārij al-Wuṣūl ilā Ma'rifat Faḍl Āl al-Rasūl wa-l-Batūl*, ed. Muḥammad Kāzīm al-Maḥmūdī, [Qom], 2004/5.
- ND : Abū Sa'īd al-Ābī, *Nathr al-Durr*, ed. Muḥammad 'Alī Qurna, 7 vols, Cairo, 1980-89.
- NM : 'Umar b. Shujā' al-Dīn al-Mawṣili, *al-Na'im al-Muqīm li-'Itrat al-Naba' al-'Azīm*, ed. Sāmī al-Ghurayrī, Qom, 2009.
- NQ : Ḥamd Allāh Mustawfī, *Nuzhat al-Qulūb*, ed. Mīr-hāshim Muḥaddith, 2 vols, Tehran, 2017/8.
- QJ : Ibn al-Sha'ār, *Qalā'id al-Jumān fī Falā'id al-Shu'arā' Hādihā al-Zamān*, ed. Kāmil Salmān al-Jubūrī, 9 vols, Beirut, 2005.
- SS : Ibn al-Jawzī, *Ṣifat al-Ṣafwa*, ed. Khālid Muṣṭafā Ṭarṭūsī, Beirut, 2012.

- TA : Ibn al-Khashshāb al-Baghdādī, *Tārikh al-A'imma wa-Wafayātuhum*, ed. Thāmir Kāzīm al-Khafāji, Qom, 2011.
- TF : 'Alī b. 'Īsā al-Irbilī, *al-Tadhkira al-Fakhriya*, ed. Ḥātim Šāliḥ al-Dāmin, Damascus, 2004.
- TH : Ibn Ḥamdūn, *al-Tadhkira al-Ḥamdūniya*, ed. Iḥsān 'Abbās and Bakr 'Abbās, 10 vols, Beirut, 1996.
- TI : Shams al-Dīn al-Dhahabī, *Tārikh al-Islām*, ed. 'Umar 'Abd al-Salām Tadmuri, 55 vols, Beirut, 1987-99.
- TKhA : Ibn al-Sā'ī, *Tārikh al-Khulafā' al-'Abbāsiyin*, ed. 'Abd al-Raḥīm Yūsuf al-Jamal, Cairo, 1993.
- TT : Muḥammad b. Jarīr al-Ṭabarī, *Tārikh al-Ṭabarī : Tārikh al-Rusul wa-l-Mulūk*, ed. Muḥammad Abū al-Faḍl Ibrāhīm, 10 vols, Cairo, 1968.
- TU : Abū al-Qāsim 'Abd Allāh b. Muḥammad al-Qāshānī, *Tārikh-i Ūljāytū*, ed. Mahīn Hamblī, Tehran, 1969.
- TWSh : al-Ḥurr al-Āmilī, *Tafṣil Wasā'il al-Shi'a ilā Taḥṣil Masā'il al-Shari'a*, ed. Mu'assasat Āl al-Bayt, 30 vols, Qom, 1993.
- UU : Ibn al-Biṭriq al-Ḥillī, *'Umda 'Uyūn Šiḥāḥ al-Akḥbār fī Manāqib Imām al-Abrār*, ed. Sa'īd 'Irfāniyān, 2 vols, Qom, 2015.
- WKh : Faḍl Allāh b. Rūzbihān Khunjī, *Wasīlat al-Khādīm ilā al-Makhdūm : dar Sharḥ-i Chahārdah Ma'sūm*, ed. Rasūl Ja'fariyān, Qom, 1996.
- WW : al-Šafadī, *Kitāb al-Wafī bi-l-Wafayāt*, ed. Aḥmad al-Arnā'ūṭ and Muṣṭafā Tidhkī, 30 vols, Beirut, 2000.
- YI : Raḍī al-Dīn 'Alī Ibn Ṭāwūs al-Ḥillī, *al-Yaqīn bi-Ikhtiṣāṣ Mawlānā 'Alī bi-Imrat al-Mu'minin' wa-yatlūhu, and al-Taḥṣin*, ed. Muḥammad Bāqir al-Anṣārī and Muḥammad Šādiq al-Anṣārī, Beirut, 1992/3.
- アルファフリー：イブン・ティクタカー『アルファフリー：イスラームの君主論と諸王朝史』池田修・岡本久美子 訳，全2巻，平凡社，2004。
- メッカ巡礼記：イブン・ジュバイル『メッカ巡礼記：旅の出会いに関する情報の備忘録』家島彦一 訳，全3巻，平凡社，2016。
- 大旅行記：イブンバットウータ著，イブン・ジュザイイ編『大旅行記』家島彦一 訳，全8巻，平凡社，1996-2002。

二次文献

- Afsaruddin, A. (2002) *Excellence and Precedence : Medieval Islamic Discourse on Legitimate Leadership*, Leiden, Boston, and Köln.
- Brown, J. A. C. (2018) *Hadith : Muhammad's Legacy in the Medieval and Modern World*, 2nd edition, London.
- Dādāshnizhād, M. (2010) Barrasī-yi Kitāb-i Mafqūd *Ma'ālim al-'Itra al-Nabawiya*-yi Junābadhī.

- Muṭāli‘āt-i Islāmī : Tārīkh va Farhang* 84, 123-140.
- (2016) *Sīmā-yi Dawāzdah Imām dar Mirāth-i Maktūb-i Ahl-i Sunnat*. 2 vols, Qom.
- Donner, F. M. (2001) ‘Uthmān and the Rāshidūn Caliphs in Ibn ‘Asākir’s *Ta’rikh madīnat Dimashq*: a Study in Strategies of Compilation. *Ibn ‘Asākir and Early Islamic History*. ed. James E. Lindsay, Princeton, 44-61.
- Erginbaş, V. (2017) Problematizing Ottoman Sunnism: Appropriation of Islamic History and Ahl al-Baytism in Ottoman Literary and Historical Writing in the Sixteenth Century. *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 60, 614-646.
- Halm, H. (2004) *Shi‘ism*. 2nd edition, tr. Janet Watson and Marian Hill, New York.
- Hartmann, A. (1975) *An-Nāṣir li-Dīn Allāh : Politik, Religion, Kultur in der späten ‘Abbāsidenzeit*. Berlin and New York.
- Ja‘fariyān, R. (1994/5) ‘*Alī b. ‘Īsā Irbilī wa Kashf al-Ghumma*. Mashhad.
- Khunji, M. A. (1956/7) Faḍl Allāh b. Rūzbihān Khunji. *Farhang-i Īrān-Zamīn* 4, 173-184.
- Kohlberg, E. (1992) *A Medieval Muslim Scholar at Work : Ibn Ṭāwūs and his Library*. Leiden, New York, and Köln.
- Momen, M. (1985) *An Introduction to Shi‘i Islam*. New Haven and London.
- Patton, D. (1991) *Badr al-Dīn Lu‘lu‘ : Atabeg of Mosul, 1211-1259*. Seattle and London.
- Pierce, M. (2012) Ibn Shahrashub and Shi‘a Retorical Strategies in the 6th/12th century. *Journal of Shi‘a Islamic Studies* 5 (4), 441-454.
- (2016) *Twelve Infallible Men : the Imams and the Making of Shi‘ism*. Cambridge (MA).
- Schmidtke, S. (1991) *The Theology of al-‘Allāma al-Ḥillī (d. 726/1325)*. Berlin.
- Tonaga, Y. (2004) Sufi Saints and Non-sufi Saints in Early Islamic History. *The Journal of Sophia Asian Studies* (上智アジア学) 22, 1-13.
- Weissman, K. (1990) Mongol Rule in Baghdad, Evidence from the Chronicle of Ibn al-Fuwati : 656 to 700 A. H./ 1258-1301 C. E. unpublished Ph. D. Dissertation, University of Chicago.
- 水上遼 (2019) 『語り合うスンナ派とシーア派：十二イマーム崇敬から中世イスラーム史を再考する』 風響社.
- (2020) 「13-14 世紀におけるスンナ派の十二イマーム崇敬とヒッラのシーア派学者集団：サドルッディーン・ハンムーイー著『二本紐の首飾りの真珠』にみられる宗派を越えた伝承教授」『アジア・アフリカ言語文化研究』 99, 5-25.

表1 『悲嘆の除去』各章におけるスンナ派主要文献の引用箇所

著者名	没年	タイトル	引用箇所
Ibn Hanbal	855	<i>Musnad Ibn Hanbal</i>	【預】 vol.1: 64, 97, 118, 【1】 130, 134, 156, 158, 160, 163, 166, 174, 175, 178, 179, 180, 224, 230, 234, 240, 251, 252, 257, 267, 268, 291, 295, 302, 313, 325, 345, 360, 393, 428, 465, 466, 469, 505, 506, 507, 512, 514, 522, 526, 567, 579, 587, 597, 606, 609, 613, 621, vol.2: 121, 144, 148, 150, 157, 194, 256, 268, 269, 【2】 316, 319, 327, 328, 331, 332, 418, 【8】 vol.3: 390 【12】 vol.4: 202
al-Bukhārī	870	<i>Ṣaḥīḥ al-Bukhārī</i>	【1】 vol.1: 137, 220, 256, 294, 550, 【2】 vol.2: 299, 301, 306, 315, 318, 319, 378, 【3】 441, 443, 【12】 vol.4: 132
Muslim b. al-Hajjāj	875	<i>Ṣaḥīḥ Muslim</i>	【預】 vol.1: 36, 117, 【1】 137, 219, 220, 254, 256, 294, 295, 460, 550, vol.2: 190, 【2】 299, 301, vol.3: 209, 【12】 vol.4: 129, 132, 225, 248
Abū Dāwūd	889	<i>Sunan Abū Dāwūd</i>	【1】 vol.1: 253, 254, 256, 475, 594, 【2】 vol.2: 304
Abū 'Isā al-Tirmidhī	892	<i>Sunan al-Tirmidhī, or Jāmi' al-Ṣaḥīḥ</i>	【1】 vol.1: 203, 227, 292, 293, 294, 390, 391, 507, 508, 512, 594, 613, 【2】 vol.2: 300, 302, 304, 305, 【12】 vol.4: 122, 125, 126
al-Nasā'ī	915	<i>Sunan al-Nasā'ī</i>	【1】 vol.1: 230, 256, 292, 512, 【2】 vol.2: 303, 304
al-Dulābī	923	<i>al-Dhurriya al-Tāhira</i>	【1】 vol.1: 291, 648, 652, vol.2: 259, 263, 273, 【2】 286, 291, 307, 319, 320, 327 (<i>Kitāb al-'Itra</i> ?), 415
Ibn Jarir al-Ṭabari	923	<i>Tārīkh al-Ṭabari</i>	【1】 vol.1: 47, 129, 195, 400, 403
Ibn Khālawayh	980/1	<i>Kitāb al-Āl</i>	【預】 vol.1: 49, 86, 92, 101, 【1】 181, 182, 183, 184, vol.2: 157, 158, 159, 161, 162, 【2】 313
Ibn Mardawayh	1020	<i>Manāqib 'Alī b. Abī Ṭalīb</i>	【1】 vol.1: 135, 272, 279, 304, 332, 555, 584, 586, 613, 614, 616, 617, 618, 619, 620
al-Tha'labī	1035	<i>al-Kashf wa-l-Bayān</i>	【預】 vol.1: 39, 【1】 167, 242, 323, 324, 325, 326, 327, 529, 558, vol.2: 169, 174, 178, 【5】 vol.3: 85, 【12】 vol.4: 126
Abū Nu'aym al-Isfahānī	1038	<i>al-'Arba'in fī Akhbār al-Mahdī</i> <i>Hilyat al-Awliyā'</i>	【2】 vol.1: 300, 【12】 vol.4: 179-198 【1】 vol.1: 181, 215, 220, 226, 232, 241, 297, 331, 【2】 vol.2: 300, 328, 367, 381-387, 388, 419, 【3】 481, 【4】 vol.3: 31, 53, 【5】 107-120, 【6】 201, 208-209, 【8】 415
Ibn al-Maghāzili	1090	<i>Manāqib 'Alī b. Abī Ṭalīb</i>	【1】 vol.1: 124, 174, 272, 590, 598, 611
al-Humaydi	1095	<i>al-Jam' bayna al-Ṣaḥīhayn</i>	【1】 vol.1: 116, vol.2: 167, 190, 192, 194
al-Naṭanzī	1103	<i>al-Khaṣā'ish al-'Alawiya</i>	【1】 vol.1: 154, 163, 167, 168, 169
al-Daylamī	1115	<i>Firdaws al-Akhhbār</i>	【預】 vol.1: 106, 107, 111, 【1】 186, 226, 268, vol.2: 188, 【2】 311
al-Baghawī	1122	<i>Sharḥ al-Sunna</i>	【預】 vol.1: 33, 【1】 227, 245, 247, 251, 【3】 vol.2: 531, 532, 【12】 vol.4: 125
al-Laftuwānī	1138/9	<i>al-'Arba'in</i>	【1】 vol.1: 191, 315, vol.2: 314, 315, 318
al-Zamakhshar	1144	<i>al-Kashshāf</i> <i>Rabi' al-Abrār</i>	【1】 211, 423-426, 540, vol.2: 66, 186 【預】 vol.1: 57, 【1】 271, 439,
Ibn Ḥamdūn	1166 or 67	<i>al-Tadhkira al-Ḥamdūniya</i>	【4】 vol.3: 66, 【5】 142, 【6】 247-250, 【7】 328-329, 【8】 423-424
Akhtab Khwārazm	1172	<i>Manāqib Amir al-Mu'minin</i>	【預】 vol.1: 47, 【1】 132, 133, 135, 136, 137, 140, 143, 146, 152, 154, 161, 164, 165, 183, 191, 194, 196, 198, 202, 203, 204, 213, 222, 223, 225, 230, 231, 232, 235, 236, 238, 239, 278, 290, 292, 295, 300, 301, 303, 317, 342, 463, 466, 501, 504, 505, 510, 514, 515, 516, 521, 522, 527, 532, 537, 614, 623, 625, 627, 629, 633, 634, 635, vol.2: 102, 103, 111, 115, 118, 119
Ibn al-Khashshāb	1172	<i>Tārīkh Mawālid Ahl al-Bayt</i>	【預】 vol.1: 31, 【1】 133, vol.2: 143, 【2】 286, 297, 404, 418, 【3】 431, 482, 484, 490, 496, 【4】 vol.3: 59, 【5】 118, 【6】 209, 【7】 297, 【8】 378, 【9】 513, 514, 【10】 vol.4: 21, 【11】 80, 【12】 199
Ibn al-Jawzī	1200	<i>Sīfat al-Safwa</i>	【1】 vol.2: 131, 【3】 367, 441, 【5】 vol.3: 135-138, 【6】 162, 233-235, 【7】 263, 316, 【8】 415-416
al-Junābadhī	1215	<i>Ma'ālim al-'Itra al-Nawawiya</i>	【預】 vol.1: 28, 【1】 185, 371, 638, 664, vol.2: 144, 153, 271, 281, 286, 290, 294, 297, 300, 305, 306, 【2】 319, 【3】 346, 365, 411, 415, 423, 430, 445, 447, 490, 491, 496, 516, 535, 540, 【4】 vol.3: 36, 50, 【5】 79-85, 【6】 163, 【7】 258, 263, 264, 267, 【8】 347, 351, 415, 【9】 485, 495, 【10】 vol.4: 7, 【11】 56
'Alī Ibn al-Athir	1233	<i>al-Kāmil fī al-Tārīkh</i>	【1】 vol.1: 129, 195, 446, 460, 【3】 vol.2: 445
Ibn Ṭalḥa	1254	<i>Maṭālib al-Su'ul</i>	【預】 vol.1: 110, 111, 112, 113-115, 120, 【1】 241-242, 266, 322, 325, 392, 453, 471-477, 482-487, vol.2: 117-119, 131, 【2】 285, 292, 294, 296, 297, 343-346, 367, 371-379, 404, 415, 419, 【3】 430, 440, 451-457, 463, 469-471, 490, 491, 496, 499, 504, 505, 512, 【4】 vol.3: 5, 23, 31, 【5】 79-85, 【6】 151, 154, 161, 【7】 257-262, 【8】 335, 347, 415, 【9】 483-485, 【10】 vol.4: 5, 【11】 55-56, 【12】 121-135
al-Kanjī	1260	<i>Kifāyat al-Ṭalīb</i> <i>Kitāb al-Bayān fī Akhbār Ṣāhib al-Zamān</i>	【1】 vol.1: 214, 219, 272, 297, 299, 300, 314, 331, 653, 662, 663, vol.2: 5, 288, 【12】 vol.4: 200 【12】 vol.4: 200-224
al-Ras'ani	1262 or 63	[Faḍā'il 'Alī]	【預】 vol.1: 111, 【1】 147, 163, 166, 188, 235, 268, 306, 313, 315, 542, 544, 546, 555, 586, 【2】 vol.2: 312

凡例：5回以上引用・言及されるもののみを記載。数字はKGhの刊本で引用元として言及される頁を指す。なお、明らかな孫引きは除く。ひとまとまりの引用が数ページわたる場合はハイフンで記した。【】は何代目のイマームの章かを示す。「預」はムハンマドを指す。

表2 『悲嘆の除去』各章におけるシーア派主要文献の引用箇所

著者名	没年	タイトル	引用箇所
al-Humayri	916以降	<i>al-Dalā'il</i>	[4] vol. 3: 66-73, [5] 120-124, [6] 210-230, [7] 298-308, [8] 404-412, [9] 514-518, [10] vol. 4: 22-29, [11] 81-100
al-Shaykh al-Ṣadūq	991	言及なし	[1] vol. 2: 163, 170, 188, 194, 253, 256, 258, [8] vol. 3: 378, 399, 402
al-Shaykh al-Mufid	1022	<i>al-Irsād</i>	[1] vol. 1: 350-353, 362-371, 375-390, 393-400, 478-479, vol. 2: 119-122, 124-125, [2] 289, 331, 336-342, 404-411, 415, 420-423, [3] 430-439, 491, 497, 541-548, [4] vol. 3: 23-35, [5] 91-107, [6] 173-200, [7] 267-297, [8] 351-374, [9] 495-513, [10] vol. 4: 8-21, [11] 57-80, 113, [12] 135-179
al-Ābi*	1030	<i>Nathr al-Durr</i>	[4] vol. 3: 61-66, [5] 138-142, [6] 235-249, [7] 316-319, [8] 416-418, 420-423, [9] 523
al-Faḍl al-Tabrisī	1153	<i>I'lām al-Warā</i>	[預] vol. 1: 31, vol. 2: 288, 290, 331 [8] vol. 3: 425-466, [9] 525-530, [10] vol. 4: 39-47, [11] 106-113, [12] 246-312, 320
Qutb al-Din al-Rāwandī	1177/8	<i>al-Kharā'ij wa-l-Jarā'ih</i>	[5] vol. 3: 125-135, [6] 230-233, [7] 309-315, [8] 412-415, [9] 518-523, [11] vol. 4: 100-106, [12] 237-246

凡例については表1を参照

*al-Ābi自身はシーア派だが、彼の *Nathr al-Durr* はアダブ書としてスンナ派の間でも知られた。

(東京大学大学院人文社会系研究科 博士課程)